

ばかりか大阪府内の指定文化財中で最も古い蔵でもある。

高蔵の様式は、いわゆる^{いたあぜくらづくり}板校倉造の高床式倉庫である。^{けたゆき}桁行3間・^{はりゆき}梁行2間の木造で本瓦葺、^{よせむねづくり}寄棟造の板蔵であり、建造に釘が一本も使用されていないため、「^{くぎなしぼうこ}釘無宝庫」という別称をもつ。

なお、戦前に書かれた『住吉の史蹟名勝』（昭和9年・大阪染料商壮年会発行）には、この蔵が「俗に左甚五郎の作」と紹介されている。^{ひだりじんごろう}左甚五郎とは日光東照宮の“眠り猫”などで有名な伝説的彫刻職人であるが、その作品と噂されるほどの珍奇な存在であった。

校倉造といえば、誰しものが正倉院を思い浮かべるが、大阪の住吉にも文化財として存在していることはもっと注目されるべきであろう。

建立について、桃山時代の慶長11・12年（1606・07）の記録「津守家盛記」（『住吉松葉大記』所引）に、高蔵4棟の造営記事がみえている。そのうち2棟が現存するが、建立からは実に400年余の時を経ていることになる。

明治以後、高蔵は境内の整備によって数度移築されている。南高蔵は明治14年（1881）南^{ひらはし}牧橋の東南あたりから神館の域内に移されたが、昭和45年（1970）現在地の第一本宮東側に移築となった。同時に、今よりも北にあった北高蔵もまた現在地に移築したので、今日のように南北2棟が並ぶようになったのである。

移築時には、^{はなはだ}損耗が甚しかったため細心の注意を要したが、竹原技師の指導により解体修理が行われ、用材・瓦・木組に至るまで時代考証に基づいた補修がほどこされた。

南北2棟の高蔵は、それぞれ構造形式は似ているが、礎石の上にある十二本の丸柱

に架かる台輪の桁行が、北高蔵は3本、南高蔵は2本と異なっている。また、北高蔵は、桁行5.40 m（17.82尺）、梁行4.81 m（15.88尺）の規模をもつ。対する南高蔵は、規模がやや小さく、桁行4.85 m（16.01尺）、梁行4.24 m（13.98尺）となっている。

以上のような歴史的価値によって、平成11年（1999）には府指定有形文化財に指定され、ついで平成22年（2010）12月には国重要文化財に追加指定された。

高蔵は長らく神宝を秘蔵する「宝庫」であったが、境内に住吉^{ぶんかかん}文華館（昭和52年竣功）が出来たことにより、神宝類の収蔵庫としての役割は終えた。しかし、蔵としての生命は消えておらず、祭具の収蔵庫として今日も用いられつづける現役の蔵である。まさに住吉を代表する蔵にふさわしい存在であろうと思われる。



住吉の高蔵（重要文化財指定）

大阪最古の文庫「住吉御文庫」

住吉^{おぶんこ}御文庫は、写本・版本をはじめ貴重な奉納書籍約五万冊を保存する蔵である。漆喰塗の土蔵造で、屋根寄棟造の二階建、^{からはふ}唐破風屋根（中央部を弓形に盛上げ、曲線状に左右を反らせた屋根）の向拝（正面に突き出た^{ひさし}庇部分）がつき、^{なまこかべ}海鼠壁（壁に正方形の平瓦を貼り並べて漆喰の継目を盛り上げる伝統工法）の美しい腰をもつ。その